

ゆるぎ松

匠 探訪
146

安久山区（飯高地区）の圓静寺は、境内の20基余りの板碑から、1330年代になりこの地域に日蓮宗が進出したことを伝える寺院です。

同寺には市の文化財に指定されている1419（応永26）年の板曼荼羅や板碑のほかにも地域の歴史を伝えるものがあります。

その一つが「ゆるぎ松」の伝説です。かつて



安久山の句碑

門前には「ゆるぎ松」と呼ばれた松の古木があり、ある時村人が集まり根元を切り始めると、不思議なことに真っ赤な血が噴き出したと伝わります。驚いた村人たちは、塔婆を立て村中の安全無事を祈ったということです。

寺の記録によると、1738（元文3）年4月のある日、朝6時から昼ごろまで赤色の水が流れ出し村人を慌てさせた、とありますが、おそらく大雨による土砂が流れ出したのでしょう。そして松を植えて、村の安穩を祈ったことで、「ゆるぎ

松」の伝説が生まれたのかも知れません。

江戸時代も

後期になると、この地方でも農民の間に俳諧が広まっていたようです。安久山村の木下兼治は、全国の俳諧師から「松の発句」などを集めて「揺松集」をまとめました。この句集には村周辺の市域20か村、80余人の俳人が句を寄せています。

2代目とも3代目とも言われた「ゆるぎ松」は、1975（昭和50）年に枯れてしまいました。その根元にあったとされる松尾芭蕉の句碑が現在も残されています。松尾芭蕉の年忌などに地方の俳人たちにより造立された句碑は、市域に10基余りあるとされています。

安久山の句碑は、縦横約75cmの平石に、「此道に出てすゞしさよ松の月」と刻まれています。「揺松集」の出された1800年ごろに、木下氏らにより造立されたものでしょう。

（市文化財審議会委員・

依知川雅一）

閩秘書課広報広聴班

☎73・0080